Sun 16

Spring 2024

茨城県
東茨城郡
茨城町

まちとつながり

日日（にちにち）　移ろい　折々を成す

龍　天に昇り　木々　地に芽晴（めばれ）を生む

息吹　歩み　幾重の霞となり

地の彩り　在り方　先へと照らす

Sunは　茨城町と　ゆるやかにつながる　いくつもの縁を

人々の暮らし　情景と共に　綴り伝えていきます

撮影場所:小堤地区

Contents　目次

03 くらしをしあわせにするって どんなことですか？

05 特集一ゆらぎ

09 ひとがあつまる 場所のありかた
文化でふくしする

11 まちで暮らす人 まちを想う人

17 連載　マチのケシキ

18 編集室から

Sun 16
茨城県 東茨城郡 茨城町
Spring 2024

Cover
“つつむ つむぐ”
長年にわたり湖畔で貸船業を営む
広浦屋の長洲さん。
訪れる人へ差し出すその手に
人と人との縁をつつむような
あたたかさがありました。

呉恩惠さん

くらしをしあわせにするってどんなことですか？

文＝倉田美咲姫　写真＝竹内慎

近頃、耳にする機会が増えた"福祉"という言葉
辞書には〔しあわせ・幸福〕とある
暮らしのさまざまなことに関わる福祉を"地域の幸せ"そのものとみると
思った以上に捉えどころのないことなのでは…
地域の福祉に詳しい呉さんに話を聞きました

呉恩惠［お・うんへ］
茨城キリスト教大学生活科学部心理福祉学科・専任講師。日本と韓国の社会福祉士、精神保健福祉士、韓国の作業療法士の国家資格を所持。日本の生活相談支援センター、韓国の中央自殺予防センター（現韓国生命尊重希望財団）で働き、日本に戻り、早稲田大学、東洋大学の教員を経て現職。

これまでの福祉

戦後、日本では貧困が最大の社会問題となりました。被災者、戦災孤児、高齢者など社会福祉制度を必要とする人が多く出たことを受け、福祉三法が制定されました。その後、昭和三〇年代を迎え、高度経済成長により福祉六法体制へと拡大し、国の福祉の基礎が整いました。

戦後の経済復興から経済優先社会が進むにつれ、伝統的な地域共同体の変化などの社会福祉問題も大きくなり、国民の大きい関心ごとになりました。昭和四〇年代には在宅福祉サービスが試行され、これが地域福祉への第一歩となり、障害者が地域社会の一員として暮らせる環境づくりの政策が生み出されました。

現在、貧困だけでなく、DV、自殺など福祉の必要性は多様化・複雑化しました。それは、コロナ禍のさまざまな出来事から共感できると思います。これまで自立できていた人たちが、コロナ禍で社会福祉なくしては生活ができなくなりました。〝明日の暮らし〟をどうするか。喫緊の課題を前に、福祉は今活用できるものでどのような支援をしていくかが今後のテーマとなったのです。

これからの福祉の要とは

現在の福祉の考え方は、地域福祉が主流となっています。地域福祉では、まちに住む誰もが安心して暮らせるまちづくりのために、公私の社会福祉関係者だけでなく、住民の協力が不可欠であるとしています。そして、地域住民の福祉のニーズを知り、何が必要なのかを考えます。課題の「見える化」には、まちに住む人と人とのふれあいが最も効果的だと言えます。例えば、地域のお祭りなどで障害者施設の方が作ったものを販売するなどしているのは、「自分たちの存在を知ってもらう」ことを目的としているのではないでしょうか。

私の専門は、精神障害者の地域社会参加で、その観点から見ても、障害のある方が住みやすいまちは、同時に誰でも住みやすいまちとなります。身体に障害がある方にはバリアフリーが必要となりますが、これは高齢者にも当てはまりますし、自分と違う人への偏見・差別の壁をなくすまちづくりが進めば、障害者も地域住民も精神的な安心感を持てます。福祉というと、「難しい」もの、「介護」や「介助」をすることといったイメージがありますが、どんなかたちであれ「ふだんの暮らしをしあわせにする」この頭文字をとって「ふくし」であると考えています。

人の生活が安定しなければ豊かな社会を目指すことは難しいです。現代の格差社会は犯罪や社会問題を引き起こし、不安を助長させます。豊かな社会をつくるためには福祉を充実していく必要があります。それぞれの地域でしあわせに生活していくことは誰もが目指しているものであり、それを実現していくのは、そのまちに住む地域住民であると思います。

「そこにある」を活用する

地域福祉には住民の力が不可欠であると話しましたが、「手伝ってほしい」と声をあげると集まってくる住民は思っている以上に多いと思います。それらの人や企業の強みがつながり合うことで、思いもしない大きな力が生まれることがあります。こうした強みに焦点を当てていく考え方を〝ストレングスモデル〟と言います。私が働く大学では「地域の役に立ちたい」、「人の役に立ちたい」と考えている学生が多く、そういった若い力を地域とつないでいけたらいいですね。

学生の積極的な声がある一方、総務省が全国の六〇〇市町村を対象とした自治会等への加入率を調べたところ、平成二二年度から令和二年度までの調査で減少の一途を辿っています。減少傾向にある自治体では、メンバーの高齢化や担い手不足を課題に挙げています。ある自治体では、加入特典として商店街で使えるクーポンを発行するなど、加入者にも利用された飲食店にも、利益が還元される流れをつくる工夫をしています。「つながり」は地域福祉にとっての要です。住民同士のつながりを、地域にあるものを活用してつくっていくにはどうするか。今一度、自分たちのまちにあるものを見返すことが大事です。

豊かな地域をつくるのは、人と人とのつながり。呉さんのお話を聞き、そう感じました。わたしたちの町では、どのような人たちが福祉に関わっているのか。また、地域の人たちはどのようにつながり「しあわせ」を感じているのか。これらを知ることが、これからの豊かなまちの在り方のヒントになるのでは、と思いました。

人がうごくと　そのまわりに波紋が生まれます
波紋はだんだんと拡がり　その人を離れ
思いがけない人へと届くはずです
人のしあわせをねがうことは
地域のしあわせにつながります
〝しあわせに生きる〟ことにむかって
うごいている人たちに
会いにいきたいと思います

特集

ゆらぎ

構成／石川聖太　文／倉田美咲姫　写真／竹内慎

高い空と広い田畑が続くのどかな景色を進むと、オープンテラスのある建物が見えてきます。その場所へ車を走らせると、〝Ami Cafe'〟と書かれた一軒のおしゃれなカフェがありました。

ひとが集まる本格的なカフェを目指す

広い庭でのんびりと草をはむヤギたちを横目にカフェのドアを開けると、やわらかな陽の光が差し込む店内にコーヒーの香りが広がります。焼き菓子のメニューや説明も、手書きで一つひとつ丁寧に書かれています。

「人の手が生み出すあたたかさを残しつつも、プリンやシフォンケーキなどは本格的な味を目指しています」と話をしてくれたのは、就労支援事業所はたらくガッツ村の山口さんと黒崎さんです。

「当初、われわれスタッフ全員がスイーツづくりの経験がなく、全くの素人でした。手探りでシフォンケーキを焼き、移動販売で売ってみたら好評で。その活動から十年の節目に、Ami Cafe'［アミカフェ］を始めました。お客様に足を運んでいただくためには、味の確かな裏付けが大事。そのことが利用者さんの仕事や給与にも反映されます。飲食店を続けていくためには大切なことですよね。」

アミカフェの外観。アミ［ami］はフランス語で友人という意味。
伺った時、利用者さんたちが楽しそうにお話をしていました。

7ページ：右から／カフェは一般の方はもちろん、茨城補成会で働く人たちや利用者さんなども利用する。／作業をする利用者さん。／レストラン ビストロ・ラ・ポルト・アミの根本さんと江沼さん。8ページ：左上から／児童発達支援センターひぬまきっずの子どもたち／アミカフェに花を届ける利用者さん。／にこやかに花を受け取ります。／レストランのスタッフさんたち。

好きな仕事を選ぶ

「カフェという業態にはさまざまな作業工程があります。お菓子に使う卵や果物の洗浄、店内外の清掃や装飾などの作業を事業所の利用者さんが担当します。はたらくガッツ村では、カフェの他に、レストラン、農作物の受注・生産など多種にわたる仕事があります。お声がけがあれば商業施設などの草刈りも担当します。『がんばってね』とお客様から声を掛けられることもあり、利用者さんのモチベーションになっています。」

「就労支援では、利用者さん一人ひとりの性格に合わせ、好きな仕事を見つけることを大切にしています。利用者さんの仕事の幅は段階的に広げていき、一般企業での実習を経て、マッチングすればそのまま就職することもあります。フレンチレストラン ビストロ・ラ・ポルト・アミでスタッフとして働く根本さんもその一人です。自分の好きなものでいきいきと仕事をしてもらえばこちらも嬉しいし、利用者さんもご家族の方も安心できるのではないでしょうか。働くことで経済的な安定を得たり、楽しみや生きがいを見つけることは、障害があってもなくても、生きている幸せだと私たちは思います。」

はたらくガッツ村のことを終始笑顔で一つひとつ丁寧に説明してくれた山口さんと黒崎さん。利用者さんたちと新しい仕事を考え、形にしていくことを心から楽しんでいるようで、「働くって楽しい」ということにあらためて気付かされました。

もう一つ上のしあわせをもつために

はたらくガッツ村が運営するアミカフェは、社会福祉法人茨城補成会が取り組む多機能型福祉モールのひとつです。

茨城補成会は、昭和二九年から半世紀以上にわたり、児童養護施設や障害児・障害者施設を運営してきました。令和四年度から新たに「絆・思いの共有」「仲間づくり」「挑戦する」を柱に〝HUMAN SOLUTION TOWN〟という言葉を掲げ、日々さまざまな活動をしています。理事長の檜山太一さんに、福祉の担い手についてお話を聞きました。

「現在、力を入れているのは、〝発信〟すること。私たちの活動を皆さんに知ってもらうことで、自分たちの地域に福祉を受けられる場所があるという安心感を広めたいと考えています。そのためには、これからの福祉の担い手も必要です。福祉に興味のある人たちに私たちを知ってもらうためにも、日々発信をし、新しい担い手たちが活躍できる場所をつくっていきたいと考えています。」

福祉の持つ閉鎖的なイメージを払拭し、どんな職場か知ったうえで安心して入ってきてほしいという想いは、担い手に寄り添った考え方だと感じました。実際に、県内の大学を卒業した方や、地元へUターンをした方が職員として働いているそうです。

「〝HUMAN SOLUTION TOWN〟という言葉には、仕事への挑戦や友人づくり、家族との良好な関係づくりなど、利用者さんがそれぞれ抱えている課題を支援したい、という意味を込めています。利用者さんには、働いてお金を得るというところから、さらにもう一つ上のしあわせを得てほしい。人の豊かさやしあわせは、〝一人じゃない〟ということだと私たちは考えています。」

この場所に住む きっかけをつくる

「これからの福祉は、地域の方たちを巻き込む形にしたいと考えています。茨城補成会を起点としてさまざまな経験をお持ちの方が集まり、各々がやりたいと思うことを実現することで地域に関わる人が増え、人と人とが交流し、新しいつながりが増えていけば、地域はもっと良くなっていくと思います。」と檜山さんは語ります。

また、茨城補成会で働く職員さんの中には、全くの異業種で働いていたという方も多く、その多様さがさまざまな事業に反映されているそうです。経営しているフレンチレストラン ビストロ・ラ・ポルト・アミの店長齋藤さんも、以前は自身でレストランを経営していましたが、縁あって茨城補成会の給食の仕事に就き、今に至ります。同じく厨房で働く坂場さんはプロのパティシエです。これからどんな方が福祉の担い手として茨城補成会の門をたたくのかが楽しみです。

檜山さんのお話を通じて、地域で暮らしていくことと福祉が続いていくことは、実は人の一生に寄り添う共通の目線であることに気が付きました。一つの地域で長く暮らしていくことで、そこに住む人をはじめさまざまな関わりが生まれます。その場所に暮らす方が、日々しあわせを感じて生きるために寄り添って動く。それぞれの関わりが少しずつ広がっていく。それこそが福祉の在り方であり「地域が持つ力」として、今後大きく反映されていくのではないかと感じました。

社会福祉法人茨城補成会
ibaraki-hoseikai.jp

ひとがあつまる場所のありかた

- 文化でふくしする -

「くまさん、くまさーん！きつねたちはよこになるおおきなくまさんにこえをかけました」
絵本の読み聞かせの声に、じっと聞き入る子どもたち。
図書館のようにくつろぐ親子の姿が見られるここは、実は書店のフロアの一角。
本を通じた地域と人の取り組みを
株式会社ブックエースの平澤亜里沙さんにたずねました。

好きと向き合える場

「この場所にはもともと違う書店さんが入っていましたが、令和四年十一月に当店がリニューアルをしオープンしました。ショッピングモール内の書店なので、訪れるのはファミリー層が多いです。〝子どもたちが楽しくなる書店〟を目指すとともに、どの年代の方も足を運んでいただけるような地域最大級の品揃えを持つ書店です。特に、さまざまなジャンルのコアなファンに刺さる〝沼棚〟があるのも特長です（笑）」と平澤さんは語ります。

広い店内には本だけでなく、文房具やコスメ、子ども向けの駄菓子コーナーもあります。併設されたカフェでゆったりと本を読むこともでき、自分の「好き」とじっくり向き合える場所がつくられています。

本との出会いが地域の文化を創る

「特に、児童書の数を多く揃えているのには理由があります。子どもたちが児童書や絵本に触れることは、情操教育を伸ばすことはもちろん、日常生活では体験することのできない世界を知るきっかけになると思うんです。そうして、本を身近に感じる子どもたちがやがて大人になり、地域の文化をより良いものにしてくれる、そんな願いがあるんです。」

さらに、子どもたちの未来への思いと一緒に聞けたのは、実店舗へのこだわりでした。「店内の本棚にはそれぞれ担当がついています。児童書、コミック、専門書、雑誌とジャンルはさまざまですが、担当がお客様の声に合うように選書を行っています。AIがデータに基づいて関連本を自動的に表示するのとは違い、実際の人間が考える選書には〝選ぶ人の想い〟があり、時には思いがけない本との出会いを提供できることも強みだと思っています。」

ただただ本を並べるだけでは、手に取ってもらえない。本の持つ力を信じ、出来ることに想いをもって取り組む。雑貨や駄菓子などさまざまなものを見て、本棚に戻っていく家族連れの背中を見送る平澤さんの目線は、地域の未来をもみつめている気がしました。

＊

「おたがいさま」と「ありがとう」

例えば、電車で席を譲ってもらったあとに、「ありがとう」の前に「ごめんなさい」という言葉がつい出てしまうことがあります。人に何かをしてもらったときに、すまない、申し訳ないと思うからです。ここに少し言葉を足すと「本当は自分一人でなんとかしないといけないのに、あなたの手を煩わせて申し訳ない」ということになるのでしょう。わたしたちが今まで大切にしていた「個」や「平等」といった価値観が少し行き詰っているのを感じます。

最近、「ウェルビーイング」という言葉をよく耳にします。これには決まった訳し方はないそうです。「しあわせとは」「福祉とは」と考えはじめた今回ですが、定義を探すことにあまり意味はないんだと至りました。

どんなことにしあわせを感じるか、人のしあわせをどう願うかは、その時の状況で変わってゆくものです。しかし、その軸にあるのは、小さな「しあわせ」であっても、「しあわせ」に向かい続けていくということ。人とつながることを前向きに捉え、「ありがとう」「おたがいさま」と声に出せるような関係づくりが、「ふだんのくらしをしあわせにする」ことにつながっていくのだと思います。

写真1　小沼渉
撮影場所｜ブックエースTSUTAYAイオンタウン水戸南店

写真上から：読み聞かせボランティアの横関さんが話しだすと子どもたちの表情が変わります。／かじりつくようにお話に夢中になる子どもたち。紙芝居の舞台があると話を聞く子どもたちの反応が全然違うそう。／定期的にクラフトイベントやワークショップなど、人が集える取り組みを日々行っています。と話すブックエースの平澤さん。

株式会社ブックエース
book-ace.co.jp

まちで暮らす人 まちを想う人

— Feeling × Thinking

寄り添えるものをつくる

まちで暮らす人

エAyCデザイナー　小川学

写真＝アラタケンジ　文＝二川ナオミ

小川さんは茨城町三島地区生まれ。高校卒業まで町内で過ごし、ニュージーランドへ留学。帰国後、美容師学校を経て都内で美容師として過ごし、二〇一〇年に帰郷。自宅の壁を飾るため、身近にあった園芸用の針金で息子が喜びそうな動物を作ったことがきっかけとなり、二〇一七年よりワイヤーアート作家「HAyU(ハユ)」として活動をしています。

まちで暮らした時間

アーティストの方って子どもの頃から文化芸術に親しむ機会があるイメージですが、僕は全然そういうタイプではありませんでした。僕の実家は茨城町の三島という地区で、長岡小学校へ通っていたのですが、学区としては外れの方に位置していて、片道四キロくらいの道のりを毎日歩いて通学していました。当時は今のように登校班や通学路もしっかり決まってなく、冬の寒い日には遊び半分で厚く氷の張った水路の上に乗り、氷が割れてぐしゃぐしゃになったこともありました。漫画が好きだったのでキャラクターを真似して描いたり、近所の畑にラジコンのコースを勝手に作って親に怒られたりしてましたね。中学生の頃はグローブが欲しいという理由で野球部に入りましたが、部活よりもスーパーファミコンに夢中になっていました。活発でしたが割と勉強もできたので、家から自転車で通える水戸の緑岡高校に進学しました。

高校でできた友人たちから、音楽やファッションなどたくさんの刺激を受けました。地元ではみんな邦楽しか知らないのに、学校では洋楽を聞いている子も多く、やれニルヴァーナだよ、グランジだ、などと話していたので「水戸にいる子は文化レベルが高いなー」って思っていましたね。

美容師、農家、作家として

高校二年生の時、友人が学校の中庭に張ったテントの中でカップラーメンを食べる様子を見たのと、当時ブームだったアウトドアファッションが好きだったこともあり、山岳部に入部しました。実際に山に登ったりするうちに今度は自然や環境の分野に興味が湧き、卒業後はニュージーランドの環境系の大学に進学しました。しかし実際に行ってみると、僕には肌が合わず半年ほどで諦め、今度はヨーロッパで暮らしてみたいと思うようになりました。それにはひとまず手に職をと思い、現地で知り合った日本人が美容師をしていたこともあり、一旦帰国し美容師の勉強を始めました。東京での暮らしは日々楽しいことが多く、気づけば海外暮らしへの憧れは無くなっていましたね。

学校を卒業し一〇年ほど美容師として仕事をしていましたが、二〇代後半になり、田舎に帰りたいという思いも強くなっていきました。実家は園芸農家で僕は長男だから、いつかは帰って家業を継ぐんだろうなと思っていたのと、もし継ぐのであれば両親が元気なうちにいろいろ教えてもらいたいと思って、妻を説得して茨城町に帰ってきたのが、二〇一〇年のことでした。

帰郷後に建てた自宅の壁を飾るアートとしてちょうど良いものが見つからず、いっそ自分で作ろうと思い、手近にあった園芸用の太い緑色の針金で息子が好きそうな動物を作ったのが僕のワイヤーアートの原点になりました。息子も喜んでくれたので、それから時間のある時に月に一体くらいのペースで制作してはインスタグラムに投稿していました。作家として本格的に活動しはじめたのは二〇一七年。たまたま僕の作品が女優の石田ゆりこさんの手に渡り、

彼女のインスタグラムで紹介していただいたことで僕のインスタグラムのフォロワーも一気に増え、制作の依頼が来るようになったんです。せっかく著名人が評価してくださっているのに農家の片手間でやっています、というのもなんだか失礼だと思ったので、本格的な仕事にしようと決心しました。

ワイヤーアートで目指す先

僕はワイヤーアートにおいて、自分の表現を追求することよりも、実際に飾ってくれる人の生活を想像して制作しています。家に飾るものとして大きすぎず、重すぎず、気軽で変化が感じられる作品であることを考えながら作っています。ワイヤーアートは軽いのでピンで固定でき、作品を複数組み合わせることでストーリー性を持たせたり、鑑賞する時間によって異なる印象を楽しんだりもできます。美容師だった時は、きれいにカットして終わりではなく、その後の扱いやすさや再現性も意識していたので、ワイヤーアートでも同じように僕個人の表現追求というよりも、住環境や生活スタイルに馴染みやすいインテリアとしての作品、ということを意識しています。とはいえ、個人の表現としてのアイデアもたくさんあるので、将来的には今までやってきたことをベースに、一目で「HAyUの作品だ」と分かるプロダクトをデザインしたいと考えています。

まちへの想い

茨城町は良くも悪くも、変化が少ない場所だと思います。変わらない故郷があるのはいいなと思う反面、行政にもっと地域の変化を促す役割を期待する気持ちもあります。でも、何かやってもらいたいとお願いするよりは、まず自分が行動しながら、新しいものを、地元でしかできないものを作れたらと思っています。現在はふるさと納税返礼品への作品提供のみですが、今後も少しずつ貢献ができたらと思います。

HAyU
hayu.site

幸せはあなたと私をつなぐ

まちを想う人

日本語教師　マルティ小室直子

文＝ホシカワリエコ

文＝倉田美咲姫

小室さんは一九七八年茨城県水戸市生まれ。二二才から茨城町で育つ。高校在学中にＪＲＣ部（青少年赤十字）の活動を通じ出会った異文化に衝撃を受け、筑波大学第二学群比較文化学類へ進学。ボランティアや国際交流活動でさまざまな人種や価値観に触れ、自身の世界を広げる。二〇〇七年には中国へ移住し国立大学で日本語教師として働き、その後結婚。二〇一一年、夫の出身地であるスペインへ移住。現在も日本語教師として働いています。

親や先生の教えを守った子ども時代

子どもの頃を振り返ると、日記や作文、英語など文系科目が得意でした。先生に日記を読み上げられることもあり、平成元年の水戸市制施行一〇〇周年記念式典では、子ども代表として作文を読みました。当時、担任の先生に「毎日書きなさい」と言われて始めた日記は、今でも書き続けています。一度何かを始めたら長く続けるんですよね。音楽やスポーツ、英語もそうでした。親の勧めで始めたのですが、幼稚園から高校卒業まではピアノを、スポーツ少年団では小学一年生から六年生までローラースケートを、小学六年生から高校卒業まではラジオ講座で英語を続けていました。英語に関しては、高校・大学時代の国際交流に大いに役立ってくれました。基本的に親や先生に言われたことを守り、まじめに取り組む子どもだったと思います。学校では自分から立候補をしたことがないのに、なぜかいつも学級委員でした。中学三年生の時には、先生に説得されて生徒会長も務めました。その時の一番の思い出は、校則改正をしたことです。先生の指導を受けながら、それまでの「男子の坊主頭」「女子の肩以上に髪を伸ばしてはいけない」という校則を変えて、髪を伸ばすことができるようになりました。

異文化に出会い、世界が広がる

高校二年生の時、所属していたＪＲＣ部の国際大会に茨城代表として参加し、マレーシア人を自宅に招いて交流する機会がありました。マレーシアはマレー系・インド系・中華系が共存する多民族国家。実際には争いなどもあるかもしれませんが、言葉や宗教、文化などが融合して存在し、お互いを尊重しているように感じました。この時に初めて「アジアの文化」に出会い、カルチャーショックを受け、大学で勉強しようと決めました。

筑波大学の第二学群比較文化学類へ進学し、アジア研究を専攻。第二外国語は中国語を選択しました。授業だけでは中国語を身に付けることはできないと思い、語学留学をしました。実際に中国に行ってみると興味深く、もっとしっかり学びたいと思い、その後大学を休学して再度留学。日本にはないパワーがある中国に惹かれていきました。

同じ頃、飢餓のない世界を目指すＮＧＯ「ハンガー・フリー・ワールド」の青少年組織「ユース・エンディング・ハンガー」の活動に出会いました。当時二秒に一人の子どもが飢餓で亡くなっていることを知り、衝撃を受けたんです。この組織では、飢餓や食料問題についての啓発活動を行いました。発展途上国へ行き、国際会議に参加するなど、世界に目を向け異なる国の人々と直接交流することで、世界の中の日本を意識するようになりました。また、この時からボランティア活動なども「自分でできることを考えて実行する」と思うようになったんです。

多面的・多角的に考える

大学を卒業後、社会人となり就職をしましたが、「中国で働きたい」という想いを抑えることができず、二〇〇七年に中国へ移住しました。国立大学で日本語教師として働き始め、その後カタルーニャ人の今の主人と出会って結婚。念願の中国での生活を送ることができました。しかし、中国第三の都市と言われる広州市での当時の生活は、あまりにも人が多く、マナーを守っていたらバスにも乗れず買い物もできません。人を蹴落とさずには自分を守れない…というような状況でした。そのような環境で子どもを産み、育てることができるのかを考え、二〇一一年に夫の母国であるスペインに移住しました。バルセロナの郊外にあるタラッサ市で暮らし、子育てをしながら日本語教師として働いています。

振り返るとこれまでに私は、さまざまな人種や文化と関わりながら、多様な価値観を学んできたのだと思います。人々が心地よく生きるためには、お互いを理解し異なる考え方を受け入れることが大切なのではないでしょうか。また、いろいろな国を見てきたからかもしれませんが、日々の生活や選択の一つひとつが「世界とつながっている」と思うようになりました。食べ物一つを買うにしてもそうです。安いものの裏側には、その商品がフェアトレードではない、労働者が過酷な環境で働かされている、などの事情があるかもしれません。日本では「どこかでつながっている」ということが実感しにくいかもしれませんが、とても大事なことだと思うんですね。外国に行かなくても、さまざまな価値観を学ぶ機会を増やすことが大切なのかなと思います。

スペインには夏休みが三カ月間あるので、毎年茨城町に帰ってきています。すべてが快適で、空気も食べ物もおいしいです。お店や交通量などが増えて少し便利になりましたが、今のところ故郷は昔と変わらず、緑も美しくてホッとしますね。「やっぱりここが私のルーツなのかな」と思います。息子も一緒に帰ってきて、私の母校の大戸小学校で机を並べ、体験学習をさせてもらっています。私が茨城町に引っ越しをして転入したのは、小学校六年生の時。大戸小学校の生徒は挨拶がすばらしく、全学年がみんな友だちのようなアットホームな感覚で、毎日が楽しかったことを憶えています。息子には自然な環境の中で、同年代の友人たちと交流し、日本の言葉や文化を「肌」で感じてくれたらと思っています。

撮影場所：カタルーニャ州バルセロナ県タラッサ市

グッバイ！大ホールを行いました

「1,2,いば3〜!!」
昨年の夏に、
解体される町の体育館をキャンバスに
“でっかい3”を書きました。
いば3サポーターを中心に
約300名の人たちが参加。
小さい子からお年寄りまで、
たくさんの優しい笑顔が生まれました。

From Sun –編集室から–

Sun 第16号をお届けします。
今回の特集で取材したとおり、しあわせって一人ひとりによって感じることが違いますよね。特に現代では、地域のみんなだれもがしあわせを感じる環境をつくることって難しいように思います。けれど、感謝の気持ちからこつこつと、小さくてもしあわせを願うゆらぎを周りに起こしていきたいなと思いました。[ひで③]／年齢を重ねるにつれて、新しい人とのつながりが生まれる。それには、小川さんや小室さんのように自らが行動して行くことが大切であり、大事だと思いました。これからは日々、人とのつながりを意識して行きたいと思います。[963]／表紙の手!多くの苦労や経験を積んできたことが容易に想像できる手には、温かみや力強さを感じさせるとともにどこか懐かしさを感じました。[SugarⅢ]／私の地元は本屋さんがなく、隔週で中学校にやってくる移動図書館のトラックを楽しみに待っていました。本を読んで広がった想像の世界は、大人になった今でも、「私」を形作る大切な一つのピースだと思います。[シロクマさん]／一つのゆらぎが生むしあわせがきっかけになって、周りの人たちがゆらぎ、さらにしあわせが生まれる。人が集まる場所や機会をつくることは“地域をまるっとふくしする”ということになるのかもな、と今回の取材を通じて感じました。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

Sun 第16号 春号　2024年3月25日発行
企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL：029-240-7148　MAIL：iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜倉田美咲姫　二川ナオミ　ホシカワリエコ　石川聖太
写真｜竹内慎　アラタケンジ　小沼渉
絵｜やまなかももこ
印刷・製本｜株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks［順不同］
広浦屋
茨城キリスト教大学

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から7年目を迎え、
会員数は1,000名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト

連載
マチのケシキ

第16回　街と余白
絵｜やまなかももこ　文｜石川聖太

町内に、ここ一五年位の間で新しく街が出来た地区があります。人々が暮らす地区から少し離れた、田畑や藪が延々続くような場所に大きな病院ができ、その周りが宅地として開かれ、人が暮らす家々が建ち並び、商業施設ができ、憩いの場となるような広い公園が設けられました。

息抜きを兼ね、広い芝生があるその公園を歩くと、平日は近隣のお年寄りが、週末にはボールやラジコンなどで賑やかに遊ぶ子どもや家族連れなど、地域の人々が集まる場となっているようです。以前は街灯もなく不穏な雰囲気でただただ通り過ぎるだけだった場所が、こんなにも変わるとは思わなかった…と地元の人からも聞きました。

ある場所が、時間とともに表情を変えていくことには、人の営みが関わっています。故郷に根付くように暮らした時代は過ぎ、離れて暮らすことは今や珍しくありません。そんな中、人と人とが関わるきっかけになる公園は大切な場所だと思います。

子どもたちが自然と集まることで大人たちも集まり、縁のきっかけが生まれる。袖すり合うも他生の縁、ということわざもあるように、人と人とが関わることが少なくなった今だからこそ、小さな縁のきっかけになりそうな「地域の余白」が、いつの時代になっても残って欲しいと思います。

絵：やまなかももこ
画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」（くもん出版）、
「俵万智3・11短歌集 あれから」（今人舎）など。
momokomo.net

いつの時代になっても
人と人とが関わる余白は大切にしていきたいです。

Sun 第十六号 二〇二四年三月二五日発行 企画・発行 いばさふるさとサポーターズクラブ事務局 iba3@town.ibaraki.lg.jp TEL 029-240-7148

Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です